



第56回

医療と宗教について

東洋大学学長
竹村 牧男

私の専門分野は、仏教学である。一口に仏教と言っても、そこには種々様々な思想があるが、その中、世界はすべて心が映し出したものに他ならないと説く唯識思想は、概して大乘諸宗の世界観の基礎をなしているといえる。この唯識思想には、認識論、言語論、存在論などの精緻な哲学があるとともに、人間の心理の精細な分析もある。心の中でも中心になるものを心王と呼び、それに眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の五感と第六意識のみならず、末那識、阿頼耶識を説いて、八識を数えている。のみならず、これらとともに働く個別の心を心所有法(略して、心所)として、善の心や煩惱・随煩惱の心等、52の心を分析している。仏教は身体の方面についてはあまり詳しく説いていないが、心の世界の状況とその作用については、詳細に論じているのである。

煩惱とは「身心を煩わせ悩ますもの」と言うことができる。したがって、それらの心が多く起されれば、身心の不調につながることは十分、考えられよう。心所としての煩惱はその根本的なものであり、随煩惱はその派生的なものである。その内容は、簡単に示せば以下のようなものである。

【煩惱】

貪(貪り)、瞋(怒り)、癡(無明)、慢(差別意識)、疑(仏教への不信)、悪見(間違った見解。我見や極端な見解、邪見などがある)

【随煩惱】

忿(いきどおり)、恨(うらみ)、覆(しらばっくれ)、惱(きつい口撃)、嫉(しっと)、慳(ものおしみ)、誑(たぶらかし)、諂(言いくるめ)、害(攻撃心)、憍(うぬぼれ)

[以上、小随煩惱]

無慚(慚の念のないこと)、無愧(愧の念のないこと)

[以上、中随煩惱]

掉挙(そう状態)、昏沈(うつ状態)、不信(信のないこと)、懈怠(なまけ)、放逸(したい放題)、失念(記憶の喪失)、散乱(心のうわつき)、不正知(誤まった認識)[以上、大随煩惱]

これらの諸々の心は、悪として、苦しみの結果をもたらすとされている。それも、この世のうちの将来にだけでなく、死後どこかに生まれた際(来世)にも、また自分だけでなく他者に対しても、苦しみをもたらすと考えられているのである。こ